

# 儒教的家庭建設の3重の疎外とその救済的な再建方法

ウー・昆如

中華民国・国立台湾大学教授

かつて孟子は人間と獣との違いについてたずねられ、彼はこう答えた。

父子の間に愛情があるべきだ。君臣の間には正義、夫婦の間には彼らの別々な機能（役目）への注目、長幼の間には正しい秩序、また友の間には信があるべきだ。（「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」、『孟子』）

孟子が主張したこれら5つの人間関係において、それらのうち、家庭において全うされる3つがある。つまり、父子間の愛情（親）、夫婦間の別別の機能（別）、そして長幼間の正しい秩序（序）である。したがって、人と人との関係の数多くの徳が家庭に属する。

第一に、あらゆる明確な主題に実質的な定義を下したアリストテレスとは違い、<sup>(1)</sup> 孟子は人間と人間との関係が人間性の根本的な本質であると主張した。考える主体を中心とした諸関係は3つの次元的方向を持つかもしれない、つまり政治的、家庭的、そして社会的（な次元）、つまり君臣間の関係、家庭における関係、友人間の関係である。人が実践するかもしれない徳とは、正義と愛と信とである。<sup>(2)</sup> 孟子によれば、人と人との関係の中で実践される徳は、人間性を顕（あらわ）し、その生き方において正され、聖化された人間を助長することができる、という。

この短い小論において、著者は上述の徳の実践の衰退について論じ、そのような疎外を救い出す何かの解決策を提示してみたい。

## I. 第一の疎外

孔子と孟子は父なき子であるので、相続人から先祖への孝行の徳は歴史的な儒学派の流れにおいてすべての徳の中で最高の徳と評価されてきた。

孝行と兄弟の従順――それらはすべての情け深い行動の根ではなかろうか。（論語）

これは孝（行）がすべての徳の中で第一位を占めるというその後の一般的な考えに匹敵する。

孝行の優越性は直ちに息子と娘の行動を規制する。父と息子との間の（あるいは両親と子供との間の徳となるべき愛情は、二つの方向——つまり、息子から父へ、と父から息子へ（つまり、子から両親へ）——を持たなければならない。さて、孝の過剰評価は本来の愛情（親〔しん〕）の内容を狭めてしまった。子供が無条件に親に従うという責任のみが残っている。

他方、中国の伝統的な文化体系はちょうどヘブライ人のようである。どちらも子供を神からの贈物と見る。それは神の祝福のしるしである。従って、相続人を生み出すことは、孝のルールにより、万人の任務なのである。孟子はかつてこう語った。

不孝なることが三つあるが、後孫を全然持たぬことはその最たるものである。（『孟子』）

中国の伝統によれば、後孫は男、息子のみを意味し、女つまり娘を意味していない。父系制度が当時の唯一の制度であったからである。この意味で、結婚の目的は、特に父権志向の社会の背景においては、直ちに息子を生むことにある。その結果、夫婦間の人間関係もまた、無視されるであろう。この観点から、我々は、中国の伝統的なスタイルにおける結婚は若いカップルの親によってアレンジされたことは我々も容易に理解することができる。特に後孫が生まれる前に、もし夫が死んだならば、家のために男の赤子を生むことができない若い嫁に災難が容易に起こりうるということは、論理的な結論であるかもしれない。栄えある板はやがてこの勇敢で有徳な淑女に、彼女の死後に、与えられることができようが、しかし、彼女の存命中には、実に十分悲惨であった。この状況において、彼女はその家庭において肉体的にもまた精神的にも平和と安定を楽しむことはできない。家庭は彼女にとって災禍の場であって、幸福と繁栄の場ではないであろう。

孝という徳からの副作用は上述の悲惨さのそれよりもなお強かった。孔子によれば、この悲惨な女性は、次のような理由によって嫁ぎ先の家を出なかったかもしれないという。

親が生きている間は、子は離れた外国に行ってはならない。（『論語』）

親と共に生活することは、息子にとって義務的であり、嫁にとってもまたそうである。なぜなら、親と子との人間関係に対する道德規範は、愛情の逆転から孝行までであるべきであり、それは昼から夜まで、また夕から朝までの親への孝行で初めて実証されるように思われるからである。

もし、長い中国の歴史において、特に儒教倫理が征服したところでは、非常に多くの嫁

が自殺をするとすれば、それは驚くべきことではない。

当然、我々は儒教の「家庭を整えること」にまったくの関心を寄せており、そこにおいては、大多数の人々はその生活を楽しみ、またこの地上生活における自分たちの生活を全うすることもできる。「一人の死が人々に益をもたらすだろう」けれども（ヨハネ福音書 18：14）、少数派の人々もまたその価値と尊厳性を持っている。個人の個性や自立が家庭において確かめられないとき、集団的イデオロギーが生み出され、展開されるようである。この集団的なイデオロギーは家庭の自己疎外を可能ならしめる。家庭の役目は今や集団的な意味においてのみ発揮され、個人的な意味においては発揮されない。従って、個人の存在は集団的グループのためとなる。しかし、家庭の存在はあらゆる個人のためとはならないのである。

## Ⅱ．第二の疎外

愛情によって人間関係を整える家庭は、その疎外のために、もはや個人の平和と繁栄を保証することはできない。幸運にも、中国の文化史の流れにおいて、外国の文化があり、それは後漢時代にインドから来て中国に輸入され、疎外を救う救済的な解決策を提供した。インドから発生した仏教は家庭の条件を儒教的な仕方ではなく、理解している。仏教によれば、家庭は、すべての人間が苦しむ場である。また愛情はすべての災禍の原因となるだろう。仏教は、従って、家庭制度のもとですべて苦しむ者の救いとして「家庭を捨てること」を提示するのである。

儒教の「家庭を整える」という考えは一方で、共同体から個人の完成の必要性を見抜いており、それと同時に、それは他方、家庭生活によって引き起こされる愛情の喜び（快楽）を予知している。仏教の知恵は、しかしながら、誕生、年齢、病気および死の現象に関して瞑想し、生涯によって引き起こされるすべての喜び（快楽）はむなしく、最後に愛情に満ちた家庭は個人の完成に関しては障害となるだろうと結論づけている。<sup>(3)</sup>

「家庭を整えること」を培う人は、家庭生活におけるすべての喜びを楽しむ。家庭生活を非難する人は、愛情によって引き起こされるすべての災禍を追い払う。家庭を整える人間と人間のあらゆる関係を区別し、従って、彼は心の限りを込めて、力の限りを込めて家庭において生活することができる。家庭を非難する人は、家庭によって引き起こされる同族からのすべての関係から自分自身を切り離し、家庭制度よるどんな（人間）関係もなく、人と人との兄弟愛しかない僧院での生活に参加する。僧院で人は個人的にまた自立的に自分自身を陶冶することができる。

ここで家庭の疎外は「家庭を整えること」と「家庭を捨てること」との対立によって引

き起こされる。中国の文化史の流れにおいて、とくに仏教の到来の後には、人は儒教の「家庭を整えること」と仏教の「家庭を捨てること」のどちらを通して完全な環境に入ることができる。

仏教的な「家庭を捨てること」はもちろん、儒教的な「家庭を整えること」とは矛盾する。前者は一見、孝の根からそれ自体を切り離すように見られる。さらに、伝統的な中国の家庭制度は、仏教の「家庭を捨てること」を支持する人々によって不信されるだろう。それは中国の歴史において二度目の国内文化あるいは倫理的な文化の衰退であった。

インドから中国への仏教の到来は、国内文化のこの衰退を救済し始めなければならない。救済の方法は宗教的な内容をもって続く。否定的な観点から、仏教は「家庭を捨てること」のみを提示するのだが、積極的な観点から見ると、仏教は倫理的な機能において我々を鼓舞するほかに、人間全体がついにねはん、絶対の自由、絶対幸福の環境（境地）への到達を目指すほど、人間の霊的生活が自己修養を通して成就を見出すことができる方法に関する神秘的な瞑想を我々に与えてくれる。

人間生活の完成を目指すこの積極的な方法は、仏教にのみ属するのではなく、儒教にも属しており、たぶんすべての道徳主義や宗教に属しているのだろう。自己修養と自己完成は、従って、倫理的であると共に宗教的でもある。ここに我々は儒教と仏教の一致を見出す。この一致の可能性は「家庭を整えること」と「家庭を捨てること」との理論的な調和にある。

従って、中国の学者は、一方でこの疎外を救済し、他方で儒教と仏教との一致をなす2つの可能性を提示する。

1) 第1の可能性は、儒教的な「家庭を整えること」と仏教的な「家庭を捨てること」との総合の創出にある。まず第一に、仏教それ自体は中国の歴史において時によって変化する。宗教的な教理（ドグマ）は一方で、理論的な面で、それ自身をより深くするが、それに対して、他方では、宗教的な実践は信者にとっては庶民的で、より一層幼稚になる。従って、大乘仏教徒は自らを小乗仏教徒とは異ならせる。前者は学者のレベルで盛んとなり、後者は一般の人々のレベルで盛んとなる。宗教的な修道者や尼たちは両方のレベル、つまり学者と一般の人々から来ている。学者たちは、宗教的な救済は自己修養を通してのみ起こるということを知っている。自己修養は、家庭の修養と「家庭を捨てること」の両方によって実現する。従って、人はその家族全員と共に家庭において肉体的に生活することができるが、その心では、彼はあたかも仏教寺院にいるかのように、すべての宗教的な実践と祈禱をもって生活する。大乘仏教は実際に、儒教と仏教との一致を見出す。その

教理（ドグマ）によって、彼の霊的生活が仏教的であり、肉体的生活が儒教的である場合にのみ、人は「家庭を整えること」と「家庭を捨てること」の両方から自己実現と自己完成の状態に到達することができる。この調和的な中間の道の理論は、相対的な「家庭を捨てる」理論あるいは相対的な「家庭を整える」理論と呼ぶことができる。それは総合であり、一致である。

この考え方は二元論的である。人の分割は二つの要素、魂と体にある。魂と体の合一が個人をなす。個人の生活は2つの種類、つまり、霊的生活と体の生活とに分けられる。大乘理論によれば、これら2種類の生活はどちらも人間生活の目的を全うすることができる。人の体と魂への分割は、にもかかわらず、形而上学的であるが、人間の完成にのための霊と体の両方の行動の評価はただ単に形而上学的であるばかりではなく倫理的で宗教的でもある。大乘仏教にとって宗教的な救済は魂と体の両方にとって効き目があることが明らかになっている。魂が僧院にいるかのように、いわば、「家庭を捨て」た状態で働くとき、人間は仏教徒であることで十分である。もっとも、それと同時に彼の体はなお家に、つまり、「家庭を整え」る状態にいるのである。

理論的には、人間と家庭との関係は4種の分割にある。第1に、家庭の外で生きている魂と体、つまり、「家庭を捨てること」を実践している人、がいる。第二に魂は家庭の外で生きるが、体は家庭において生きている。第三に、魂と体がどちらとも家庭において生活している、つまり、全的人間が「家庭を整えること」を実践している。第4に、体は家庭の外で生活するが、魂は家庭において生活する。仏教によれば、これら4種類の家庭に対する関係の中で第1のものは最善のものであろう。これにおいては、全的人間が死後、ねはんに入ることができる。儒教に妥協して、第2の種類の関係も積極的な効果を持っている、つまり、体が家庭の中で生活しているが、魂は「家庭を捨てること」を実践するのである。

人を体と魂に分割することは、仏教をして儒教と仏教との一致が可能であるようにならしめる。儒教の倫理的志向と仏教の宗教的志向は、中国の文化史においては並行していく。「家庭を捨てること」と「家庭を整えること」との間の対比と矛盾は、この総合的で一致的な観点において消失するのである。それは、国内文化と外国文化との「対立的一致」(coincidentia oppositorum, ニコラス・クザーヌス)である。それはまた、倫理的精神と宗教的精神との調和であり、統一でもある。

この文化と精神は中国に起源を持っており、韓国や日本やいくつかの太平洋諸国のようになすすべてのアジア諸国に急速に広がったのである。彼らはみな、特に家庭の文化において、儒教と仏教の両方の理念を持っているのである。

2) 第2の可能性は、儒教と仏教のユニークな目的に存している。儒教的な修養も仏教的な修養も両方とも、同じ目的、つまり、自己完成と自己救済とを持っている。言い換えれば、両方の理論からの修養の最終的な目標は、儒教の「家庭を整えること」において、また仏教の「家庭を捨てること」において成就されうるのである。従って、人間の完成と救済は、家庭の中と外の両方において実現されうるのである。そのため、霊的生活がなお人の心の中に残っている場合にのみ、自己修養は家庭でも、また寺院でも実践することができる二元論的な分離、つまり家庭での修養と家庭の外での修養とは、この世における世俗的生活と超世俗的生活とを区別するための肉体と魂、あるいは肉と霊とにおける二元論という同じ意味を持っている。そもそも小乗仏教から発してきている聖と俗との違いは消失するだろう。人はこれからは世俗的立場でありながら、神聖なる環境の中で生活することができる。この意味で、儒教の倫理的な目的と仏教の宗教的な目的とは、同時に、同じ人において、成就されるだろう。ここで、我々は一つの絵を創造することができる。そこでは、高価な衣をまとった、ある老婦人がぜいたくな家に住んでおり、彼女の夫と子供は高官であり、彼女の左手は貴重な杖を持ち、彼女の右手は数珠を数えている。彼女は釈迦の弟子なのである。彼女は霊的には、家庭を捨てた仏教徒なのである。彼女はその生涯においては儒教と仏教の両方の完成を、死後の生においては宗教的な救済を、得ることができるのである。

長い中国の歴史において、仏教は何度か迫害を受けてきたけれども、<sup>(4)</sup> 布教は決して止むことはなく、時々栄えた。それはすべての中国の世代に広がり、宗教的な知恵によってすべての生ける物を照らした。仏教は儒教との統一により、中国とアジアにおけるそのすべての近隣諸国において国民宗教となった。

歴史は、「家庭を整えること」と「家庭を捨てること」とがアジアの諸々の社会において共に行われたのである。

実際、家庭の第二の疎外は、儒教と仏教との一致と調和により、取り除かれるだろう。仏陀への道はすべての儒教徒に開かれている。後者はこれからは幸福な家庭生活を楽しむことができ、それと同時に、仏教信徒として生活することができる。だから彼らは来たるべき生において幸福な生活を楽しむこともできるのである。

### Ⅲ. 第三の疎外

家庭制度の第一の疎外は、対人関係、特に親と子供との関係によって引き起こされる。過度に主張された孝は、この疎外の根本原因である。孝を志向する文化において、家庭のあるメンバーは楽しく、平穩に生活することができない。その結果、彼らは家庭において

その人生の目的を全うすることができない。しかし、家庭制度の第二の疎外は外来文化の侵略に存している。インド仏教の「家庭を捨てること」は、儒教の「家庭を整えること」に真っ向から対立する。幸運にも、儒教と仏教の両サイドによって引き起こされた両者の一致と調和は、この疎外に対する救済解決策を与える。さて、家庭制度の第三の疎外は、西洋の近代技術と文明および商業文化によって起こる。

伝統的な農業文化において、人々の安定とその不動の財産のために、人々は家族部族と一緒に住む。すべての社会人を結びつける愛情がある。親戚や同族間の対人関係は、静かに、そして調和的になされる。しかし、近代の技術的および商業的な社会において、対人関係は親戚と同族に基づいてはおらず、見知らぬ人に基づいている。ここにおいて、愛情はその基礎を失うのである。その代わりに、生存競争がある。対人関係の複合性、男と女の交換、解放、性開放、それらすべては社会の本質的な変化を引き起こしている。この変化は家庭のメンバーにとって価値判断での混乱を起こすのである。今日、我々の社会において、愛人（情人）、離婚、非嫡出子、片親家庭、これらすべては伝統的な儒教の「家庭を整えること」の論とは矛盾する。

近代社会において、公正（正義）と平等は対人的な道徳の規範となっている。家庭、特に孝や妻の夫への服従という徳における階級制度は、反近代的、不正で不平等と評価され、従って、廃止されなければならないだろう。近代社会において、正しい秩序は後進的で、いじりなものである。

これは個人主義的な傾向であろう。この意味では、家庭やあらゆる種類の社会は個人主義の道具にすぎない。家庭の存在は個人のためであって、個人の存在が家庭のためにあるのではないのである。

「家庭を整えること」の代わりに、個人の自由と尊厳がその存在を獲得するのである。

孝のみならず夫と妻との対人関係もまた、近代社会においてはその基礎を失うのである。夫と妻との別々の役目という徳は、もはや小家庭においては有効とされることはできないのである。自由愛は道徳評価において大きな変化を引き起こす。親は息子や娘の結婚に大してその権利を失う。大きな家庭制度は、より小さなものへ変化した。いわゆる小家庭とか離婚によって引き起こされる片親家庭さえも存在する。独身、同棲、同性愛さえも近代と自由という名のもとに、すべて合法化されるのである。

「男はその父と母を離れてその妻と結ばれる」（創世記2：24）。孝はその基盤と価値とを失う。それは老若者にとっての無数の問題を引き起こす。孝と夫と妻との別々の役目――それは農業国家において良く行われた――は、機械的・経済的な社会においてはそ

の役目を失うのである。中国にとって、それは家庭制度の3度目の衰退であり、疎外なのである。

家庭制度の上述の疎外において、中国文化は儒教倫理と仏教、特に両理論の一致と調和によって補完されてきた。第1の疎外は、仏教の「家庭を捨てること」によって救済された。しかし、2番目（の疎外）は儒教と仏教の統一によって救済された。しかし、今度、第3の疎外は（それらよりも）ずっと強く、ずっと困難なのである。第1と第2の疎外は外部から引き起こされる。しかし、第3（の疎外）は内部から来るのである。「家庭を捨てること」において家族はただ受動的な行動を取るのみである。不幸な人は黙って、静かに家を去って、来たるべき生のために僧院へ行くのである。近代の家庭問題は革命的な思想に存している。それは行動的な反抗を必要とし、そこにおいては、家族は自己崩壊を起こし、それから家族の他の人にも影響を及ぼすのである。

中国の家庭制度——そこにおいては過度に評価された孝が不幸な生活を送る数人の家族を生じさせたのだが——における最初の疎外に対する救済は、インド小乗仏教から与えられる。その「家庭を捨てること」は、世俗のすべての愛情や悩みごとについて忘れることにおいて、僧院での霊的生活を提供する。「家庭を捨てること」は、それ自体、中国の家庭制度の第2の疎外によって引き起こされる。救済の行為は今度は中国の大乗仏教——それは中国の宗教史から、特に仏教史から発生した——から与えられる。大乗仏教は儒教倫理と仏教とを結びつける。この種の仏教は「家庭を整えること」と「家庭を捨てること」とを倫理的にもまた宗教的にも一致せしめる。上述の家庭制度の2つの疎外は、中国だけに起こったのである。しかし、家庭の第3の疎外は全世界、特にアジアの国々のような古い文化の国々にはんらんしている。世界のすべての文化は今や、この災禍に直面しており、その中で人類は苦しみ、自らを愚かで絶望的と感じるのである。悲惨な人々は救済を待ち望んでいる。

救済の可能性はあるのだろうか。筆者はこのような困難を解決するために、哲学的な理論が何かの提案を差し出すことができるかどうかを考える。たぶん、統一教会によってつくり出された解決策が用いられ、神学的観点から論じられうるだろう。

#### IV. 統一教会による解決策

まず第一に、筆者は、統一教会の理論は中国の伝統的な文化とキリスト教の一致だろうと理解している。根本的な教理の基礎が宇宙と人間の2つの要素に存している。つまり陰陽で、それは『易経』から起源を得ており、それは原初の父母、アダムとエバと結びつけられている。従って、家庭制度は統一教会において主要な問題であり、重点となっている。



「優れた人の道は、その単純な要素において、夫と妻との交わりに見出だされよう」  
(『中庸』第12章)。そのような理論は中国の古典にも、また統一教会の聖書である『原理講論』においても共に見出だされる。(5)

2つの宇宙の要素は2種類の人間すなわち男と女とにその現れと実現とを持つ。神の祝福により、男と女は結婚を通して夫婦となる(文師の解釈による、創世記における神の人類に対する第2祝福)。(6) 従って、神のみ創造主であると共に結婚の祝福(という恩恵)を与えるお方なのである。従って、すべての善と慈善は神から発し、神によって贈られるのである。神はこれらすべての事件の根本的な背景なのである。

これが神主義であり、すべての人間の利得はその起源をそこに持ち、またすべての人間の運命もそこに戻る。

従って、神と人間との関係は他のすべての関係にまさって、根本的なものであるべきである。孟子が提示するもの、対人関係の5つの徳、父子間の、君臣間の、夫婦間の、老若間の、また友人間の関係は神と人との関係の下にあってすべて従属的なのである。

統一教会が提示するもの、儒教と仏教の両方に対して補完するものは絶対なる存在、創造主なる神であり、そのお方が天地の下にある万物を生じさせたのである。神は万物の基盤である。神はまた救い主であり、我々をすべての罪と災禍から救われるのである。すべての困難と苦しみは原初の父母であるアダムとエバとによって犯された罪によって引き起こされるのである。原罪からすべての人間は苦痛と激情のもとで苦しんでいる。あらゆる種類の疎外は誇りと無知によって引き起こされる。唯一の神のみがおられ、その方は救い主であられ、人類をすべての悪から救うことができる。

統一教会は疎外の究極の原因を見つけ出し、それから伝統的な儒教とキリスト教の結合によって救済の解決策を与える。

東洋と西洋の両方の知恵の調和的な合一(融合)は、家庭制度をその疎外から救済する唯一の道であろう。

神と世界の二性性相の理解において、統一教会は家庭制度に、特に男と女との対の合一、つまり、結婚にその重点を持っている。原初の父母によって犯された原罪のために、世界におけるすべての人間の困難は起こる。統一教会はすべての結婚カップルを神の新しく生

まれた子供として祝福するために、新しい真の父母を新しいアダムとエバとして提示する。

文師によって与えられる家庭の祝福と結婚の祝福は、神によって祝福される新しい家庭を象徴する。そのカップルと子供は新しい家庭を建設し、その家庭は神が初めから創造した家庭の原型に立ち返ることであろう。

統一教会が提示する家庭はたぶん、すべての上述の疎外を回避でき、その家庭のメンバーである父母と子供は幸福にまた繁栄しながら生きていく理想家庭であろう。

## V.

キリスト教界が実践した（キリスト教的）愛と、統一教会が刷新した愛とは共に全人間関係の基盤である。（キリスト教的）愛は見知らぬ人達の間で実践される。愛は知っている人々の間で実践される。（キリスト教的）愛はその範囲を敵の世界へと広げる。「あなたの敵を愛しなさい」。<sup>(7)</sup> これはキリスト教の本質的な徳であろう。統一教会は愛を国際結婚へと広げ、そこにおいて見知らぬ人々は神の意思に従ってその相手を見出だす。このような愛は家庭、氏族、国家、そしてすべての対人問題の限界を消し去るであろう。世界の平和と人類の繁栄は近い将来実現されるであろう。新しい種類の家族は家庭の疎外野救済に対する名案であろう。

— 終り —

注

〔訳注：原文を参照されたい。〕